

あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす

今日ご一緒に読んだ福音書にはイエス様が神殿から商人を追い出す出来事が記されています。皆さんはこの場面をご覧になってどんな思いになりましたか。すっきりした気持ちになるでしょうか。それともイエス様はひどすぎるのではないかと思われたでしょうか。

イエス様がエルサレムの神殿に行かれたのは、過越祭の参列のためでした。皆さんもご存知の通り過越祭は、神様がイスラエルの民をエジプトから救ってくださった出来事を記念するための祭りです。この過越祭になると、イスラエルの全地に住んでいる人々だけでなく、海外に住んでいるイスラエルの民もエルサレムに巡礼をしました。信仰者たちは、「神殿は、神様がご自分の民と共におられる聖なるところ」であり、「信仰の求心（中心）」であると思っていたからです。

けれども、神殿の周りは世俗的な雰囲気でした。信仰者たちは神殿に参列する時、供え物を捧げました。しかし遠いところから生け贄を連れてくるのは困難でした。また生け贄は傷があってはならなかったのです。遠いところから持ってきた生け贄が傷ついて供えられなくなったらとても困ります。それゆえ、神殿の中で生け贄を売っていることは大変助かりました。祭壇に捧げる献金はただシェケル銀貨だけでした。当時使っていたローマの銀貨には皇帝の肖像が刻まれていたからです。それゆえ両替人もとても助かりました。しかし、実情は、これらの商人は、神殿の大祭司から独占的に許可を受け、神殿の境内で商売をしていましたので、彼らは大祭司に手渡す金と自分の利益をもうけるために血眼になりました。供え物と両替の手数料は高くなるしかありませんし、神殿はまるで「商売の家」のようになりました。

神殿がこのように「商売の家」のようになりましたが、イスラエルの民にとっては、神殿はいつもそうでしたし、それが当然であるとも思っていました。しかし、神殿がこのように「商売の家」のようになってしまったら、神様が喜ばれる、聖なる礼拝ができるでしょうか。自分も知らないうちに神様への真心は薄くなり、形式的な参列になってしまうでしょう。

イエス様はこのような様子を正そうと思われました。そして断固としておられました。縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出しました。両替人の金をまき散らして、その台を倒しました。イエス様のこの姿を見た弟子たちの感想が聖書にこのように記されています。

「『あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす』と書いてあるのを思い出した。」（ヨハネ 2:17）

イエス様が商人たちをこのように追い出したことは、誰にも想像できなかった型破りなこ

とであり、過激なことでした。商人たちは自分がやっていることが正しいと思っていたら、イエス様に抗議をしたはずでしょう。けれども彼らは一言も言いませんでした。彼らの代わりにユダヤ人がイエス様に問いかけたただけでした。彼らは神殿の大祭司と繋がっている人であるのかもしれませんが。彼らも神殿の中で商売をするのは正しくないと考えていたからでしょうか、イエス様に「なぜこのようなことをしたのか」は尋ねませんでした。ただ、このように問いかけました。

「あなたは、こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せるつもりか。」
(ヨハネ 2：18)

皆さんはこの問いがこの状況に合うと思われませんか。もしかしたら、ユダヤ人たちは慌てて、自分で何を言っているのかも分からずに言ったのかもしれませんが。神殿は、「商売の家」ではなく、真心をもって神様に礼拝を捧げられる聖なる場所にしなければなりません。イエス様も、「わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである」(マルコ 11：17)とおっしゃいました。

今日ご一緒に読んだ出エジプト記には十戒が記されています。神様がイスラエルの民に十戒と律法を与えてくださったのは、イスラエルの民が神様に真心をもって仕え、恵みのうちに過ごすことができるように助けてくださるためでした。従って、十戒と律法は信仰者としては当然守らなければならない戒めです。適当にやるものではありません。けれども当時のイスラエルの民はこのような十戒と律法を疎かにしていました。いいかげんにしたり、形式的に守ればそれだけで良いと思ったのです。律法学者たちは律法をより熱心に研究し、その実践的な方法まで詳しく教えてくれました。けれども、イスラエルの民は神様のみ言葉から心が離れてしまい、きわめて世俗的に暮らしていく人々も多くなりました。甚だしくは律法を自分の言い訳として使ったりもしました。両親によく仕えない息子に「なぜ、『父と母を敬え』ないのか」と言うと、「何でもコルバン、つまり神への供え物です」と言って(マルコ 7：11)、言い訳の口実として使ったのです。このような心を持って生きている人にとっては、神殿が「商売の家」になっても構わなかったでしょう。イエス様が神殿の商人たちを追い出したのは、このようなイスラエルの民を叱責して、信仰を回復しなければならないということを教えてくださるメッセージでもあります。

もちろん、私たちが十戒と神様のみ言葉をすべて守りながら生きていくのは大変難しいです。柔弱であり、限界のある人間であるからです。パウロの告白のように、「自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている」(ロマ 7：19)からです。それで、悩んで葛藤をしながら生きていく人もいます。けれども心配はしなくても良いです。自分に対して厳しかったパ

ウロでさえ悩んで葛藤をしながら生きていったからです。けれども、パウロがどのように自分の限界を乗り越えて生きていったのかを学ぶのは大事なことでしょう。パウロは惨めな気持ちを表わしながらこのように自ら問いかけました。

「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。」(ロマ7:24)

そしてパウロは、「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」(ロマ10:13)という真実を教えているのではないのでしょうか。それでパウロはこのように話を続けました。

「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」(ロマ7:25)

パウロが、「イエス・キリストを通して感謝する」と告白したのは、彼が神様のみ前で真心をもって、主のみ名を呼び求めながら、礼拝を捧げながら生きていった、ということの意味するでしょう。まさにここにパウロが自分の限界を乗り越えられた秘訣があります。

神様のみ前に真心をもって礼拝を捧げながら生きていくというのは、信仰者にとってかけがえのない大事なものです。エジプトを脱出したイスラエルの民は、抑圧から抜け出したことを喜びました。けれども、もっと嬉しく思ったのは「神様に礼拝することができる民になった」ということです。バビロンの捕虜生活をしていたイスラエルの民が、捕虜生活から解放され、イスラエルに戻ってきたことは解放そのものです。けれども、彼らにとってより重要だと感じたのは「神殿を再建し、礼拝を回復すること」でした。神様に真心をもって礼拝を捧げることが、この世の誘惑の中でも自分を守っていくためにもっとも大事なことです。

もう、コロナウイルスの感染者数もかなり減りました。緊急事態宣言は解除されていないので、油断してはならないですが、礼拝再開に対する希望が少しずつ見えて何より嬉しいです。今年のイースターとクリスマスには共に礼拝をささげることができませんでしたから、今度のイースターこそは必ず礼拝を捧げることができるようにと切に祈っております。

この度、皆さんに一つお願いしたいことがあります。それは、礼拝が再開する前に礼拝についてもう一度考えてみましょう、ということです。ある方は、「礼拝が中止されていた間、教会で他の信徒に会えないことが何より残念である」とおっしゃいました。その気持ちは分かります。けれども、「教会は何より、礼拝を捧げ、神様に会うためのところである」という事実を忘れてはいけません。平日に教会に来られても、まず祭壇の前で祈ってから他の仕事を始めてください。教会の祭壇は、神様が私たちと共におられることを表す徴であり、私たちの信仰の求心(中心)であります。いつも私たちの心を祭壇の前に置き、コロナ禍が収束され、礼拝が再開されますように、また私たちの信仰も回復されますように共に祈りましょう。

特に今週の3月11日は東日本大震災が起こって10周年になる日です。震災によって犠牲となった人々の魂が神様のみ恵みの中に安らかに憩うことができますように、また被害を受けられたすべての人々に神様の深い慰めがありますように、心を教会の祭壇に向け、祈る時間になりますようお願い申し上げます。

この一週、神様の恵みに頼り、私たちの心を神殿に向け祈り、堅固な信仰をもって、神様と共に生きることができるよう心からお祈りいたします。